
ハイスクール・デイズ

兼高由季

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ハイスクール・デイズ

【Nコード】

N7884C

【作者名】

兼高由季

【あらすじ】

進学校を舞台に繰り広げられるメガネ王子と貧乏少女のドタバタラブコメディ。

第1話 運命の入学式

その日は高校の入学式だった。

大勢の生徒に押されるようにして急いで講堂に駆け込んだモモは、つま先に感じた奇妙な感触に瞬間的に動きを止めた。

モモに上履きのかかとを踏まれた男子生徒が前のめりになったのと、すぐ後ろにいた生徒がモモの背中にぶつかってきたのは、ほとんど同時だったと思う。

「きゃあ!」という少女たちの悲鳴をどこか遠くで聞きながら、モモは目の前で派手に転んだ男子生徒を茫然と見下ろした。

「ごめんなさい!」

急いで謝罪の言葉を口にすると、すばやく身を起こした少年は、何も言わずに切れ長の目を剣呑に細めた。

(「……………ごわい」)

野生の小動物が、猛獣に出会ったかのように、モモの顔が青ざめる。恐怖でペタリと膝をついた時、何かがパリンと音をたてて割れた。

「お前……………」

何か言いかけた相手を無視して、壊れた眼鏡を差し出したモモは、最後にもう一度、謝罪の言葉を繰り返して、入学式の開始を告げる教師の声に救われた思いで、あたふたとその場から逃げ出した。

(どうしよう、どうしよう、どうしよう……………)

バクバクする胸を押さえて椅子に座っている間も入学式は粛々と進行し、在校生代表の祝辞に続いて、新入生代表による答辞が始まっ

た。

壇上に立ち、よく通る声で淡々と答辞を述べる生徒を仰ぎ見て、モモの心臓はびよんと極限まで跳ね上がった。

片方のレンズが完全に抜け落ち、もう片方のレンズには無残なヒビが入っている。

それでも表情を変えることなく完璧なスピーチを披露しているその人は、さっき自分が大勢の目の間で転ばせた男子生徒だった。

新入生代表として答辞を述べることは、成績トップで合格した生徒の役目だ。つまり目の前の少年は、他校生から皮肉と羨望をこめて「東大予備校」などと呼ばれているこのエリート高校の頂点に立っているということになる。

モモは相手の視界に入らぬよう、限界まで身を縮ませた。

「新入生代表 伊集院正隆」

名前からして賢そうな少年は最後にぺこりと頭を下げた。

第2話 追いかけてこの始まり

ステージから降りた少年が向った先は舞台から見て一番左の列。モモが立っているのは、その反対の右端の列。一組と十組なら、校舎だって違うから、顔をあわせることは滅多になさそうだ。

(思わず逃げ出しちゃったけど、壊れた眼鏡は弁償しないと……) 教師の話を上空で聞きながら、財布の中身を思い浮かべてはため息をついた。

モモの家は母と子の二人暮らし。

横領がばれて会社を辞めさせられた父は行方不明。

身体があまり丈夫でない母はレジ打ちのパートをするのが精一杯。

別に進学校に入りたかったわけじゃなく、歩いて通える公立校がこしかなかったから、必死で勉強しただけで、一刻も早くバイトを見つけないと、授業料だって払えない。

この上なく不安な面持ちでモモは周囲を見回した。

心なしか、どの顔も賢そうに見える。勉強についていける自信はこれっぽっちもないが、差し当たったの問題は日々の暮らしと眼鏡の弁償だ。

教室でのオリエンテーションを終え、急いで帰ろうと廊下に飛び出した所で、モモはぎょっとして凍りついた。

伊集院正隆が目の前に立っている。

壊れた眼鏡をかけ続けている所を見ると、よほど視力が低いのだろう。

「どうしてこの場所が!？」

思わず口にしたセリフは、刑事に潜伏先を突き止められた犯罪者のようだ。

モモの頭の中で刑事役を割り振られた少年は、拳銃を突きつけるかのようにモモの左胸を指差した。

「山田モモ」

決して読み間違えることのないシンプルな名前。

名札の文字を感情のこもらぬ声で音読した少年は、ポケットに突っ込んでいたクラス分けのプリントを目の前で無造作に広げてみせた。

「極端に字画が少ないから、眼鏡がなくても何となくわかった」

「そ、それで……」
言いかけて口をつぐんだ。

別棟の教室までこうしてわざわざ出向いてくる理由は一つしか思いつかない。

「お願いです。少しだけ時間を下さい！」

身体が折れ曲がるほど頭を下げてから、モモは自分たちを取り囲んでいる生徒たちの間をすり抜けた。

「こら、廊下を走るな！」

まだオリエンテーションが終わっていない別の教室から、教師の怒鳴り声が聞こえてきたけど、モモはひたすら走り続けた。

第3話 メガネ王子

悪夢のような日々が始まった。

正隆は毎日のようにモモの教室に現れる。

借金取りから負われる債務者のように、モモはそのたびに逃げ出した。

「伊集院様からどうして逃げ回っているの？」

帰ろうとした途端、クラスメイトに腕をつかまれた。

無邪気な質問に答える前に、公立高校の生徒らしからぬ呼称の方に驚かされた。

「いじゅういんさまあ！？ さまって何？ ひょっとして、そんな風に呼ばないと殴られるとか？」

こぼれるほど目を見開いて身を乗り出したモモを見て、クラスメイトは声をあげて笑い出した。

「何言ってるの？ 伊集院家は元華族で、伊集院様のおじいさまは日本を代表するISグループのCEOよ。お父様はIS商事の社長だし、伊集院様はその一人息子で……とにかく、私たちの憧れの王子様が、人を殴ったりするわけないじゃない」

「王子様！？ 王子様がなぜ公立高校に！？」

素っ頓狂な声を張り上げた途端、背後で人の気配がした。

放課後になると同時に教室を飛び出さなかったのは、とんでもない失策だった。

入口のドアをふさぐようにして、伊集院正隆が立っている。

「と、とにかく急ぐから」
あわただしく手を振って、障害物のない方のドアから逃げ出そうとしたが無駄だった。
脱出路をもとめて走り出した途端、すばやく移動してきた正隆に、ぐっと肩をつかまれ、引き寄せられた。

入学式から二カ月半。

眼鏡はとづくに新調されているし、大会社の社長の息子なら、これほどしつこく取り立てにくる必要もないと思うのだが、もちろん、そんなことが言える立場ではなかった。

「お願い、話を聞いて！」

「いつも話を聞かないのは、お前の方じゃないか」
懇願するように叫ぶと、冷やかな声が返ってきた。

「と、とにかく、わけを話すから、こっちへ……」

我が家の苦境を大勢の前で公表する気にはとてもなれない。
人目につかない場所へ移動しようとして相手の腕を引っ張ると、遠巻きに見ていた女生徒からブーイングがおこったが、当の本人は意外にも素直についてきた。

第4話 王子と貧乏少女

「眼鏡代が払えなくて逃げ回っていた？」

立ち入り禁止の屋上に連れて行かれ、モモの話を無言で聞いていた少年は、眼鏡代を分割にして欲しいと切り出され、珍獣でも見るような顔をした。

視線が痛い。痛すぎる。

じりじりと後ずさると、決して逃がすまいとでもするように、すと腕が伸びてきた。

息がかかるほど至近距離から見つめられて、モモは泣きそうな顔をして頷いた。

「正確な値段を教えてもらえれば、少しずつでも必ず返すから」
「なるほど。お前は俺に借りがあるということだ」

端正な顔に不思議な表情が浮かんだのを、モモは不気味なものでも見るように見上げていたが、続く言葉を耳にして、反射的に相手を突き飛ばしていた。

「じゃあ、俺の彼女になれば？ それなら、弁償は帳消しに……」

「いや、絶対にいや！」

茫然と佇む相手に思い切り拒絶の言葉を投げつけて、モモはくるりと踵を返した。

これは貧乏人をいたぶるための新手のいじめに違いない。

伊集院正隆はこの学校の王子様だと、たった今、聞かされたばかりではないか。

そう言えば、五月に実施された中間考査はパーフェクトに近かったし、その後の全国模試の結果も十位以内に入っていた。スポーツもでき、家はお金持ち、家柄も良くて、ルックスもいい。つまりは、下層社会を生きる貧乏人に興味を持つなんて、絶対にありえない。

女子トイレに逃げ込んだモモは、鏡に映った自分の顔をつくづくと観察した。

ジョンソンのベビーローションと薬用メンソレータム以外はつけたことのない肌は、年相応にきれいだが、華やかな女子高生のイメージからは、およそかけはなれている。

毎月、母が切ってくれる髪は、長めのおかっぱにシャギーを入れただけだし、バイトに忙殺されて疲れた顔をしているし、勉強時間もあまり取れないから、成績も後ろから数えた方がはるかに早い。

がっくりと肩を落としたモモは、重い足を引きずるようにして歩き出したが、校門の前に佇む長身の影を見るなり身を翻した。

「逃げるな！」
するどい命令口調にびくりと身体が震えたが、そのまま脱鬼のように逃げ出した。

(オレ様口調の王子様なんて最悪！)
その日から、モモはますます正隆を避けるようになった。

第5話 新聞配達

モモの朝は新聞配達から始まる。

最近では健康維持のために新聞配達をしている年配の人なども増えていて、バイトの募集を見つけたのも容易ではなかった。

名の知れた全国紙や地元紙は軒並みダメで、マイナーな上にもマイナーな日日新聞が、少ないバイト代ながらもモモを雇用してくれた。

珍しく配達先が増えたということで、新聞を満載した自転車をヨロヨロとこぎながら、地図上にボタンが記されたその場所まで言うてみると、あきれるほど大きな屋敷が立っていた。

門の前に一人の少年が仁王立ちしている。

まだ、朝の四時半だというのに、カジュアルななかにもピシっとした服を着て、これから外出でもするのだろうか。

「おはようございます！」

笑顔で新聞を差し出したモモは、相手の顔を見るなり、「あ」と小さな叫び声をあげた。

バサリと落ちた朝刊を、少年は無言で拾い上げた。

何かを確認するように新聞を見つめていた瞳が、ゆっくりと少女の方に向けられた。

「噂は本当だったのか」

ぼつりと呟き、痛ましそうに目を細めたのは、あろうことが伊集院正隆だ。

言葉を失ったモモの背後から、絶妙のタイミングでバイクが近づいてきた。

正隆は、バイクに乗った青年が差し出した朝刊を受け取る代わりに、立派な門に付けられた新聞受けを指し示した。新聞受けにはすでに四種類もの朝刊がおさまっている。

「もつと、らくに稼げるバイトがあるはずだ」

さがしてやるうかと声をかけられて、モモは唇をかみしめたまま首を横に振り、拒絶するように背を向けた。

なんて陰湿ないじめなんだろう。

雨の日も風の日も、正隆は門の前で待っている。

「お客様への挨拶は仕事の一部だからね」

販売店の店主の言葉を思い出し、モモはもごもごと朝の挨拶を口にした。

差し出された朝刊を受け取りながら、少年は挨拶とは全く別の言葉を言いたげに口を開くのだが、言葉はなぜか出てこない。

(こんな所、長居は無用だ)

強く自分に言い聞かせたモモは、相手の目を見ないようにして、急いでその場を後にした。

母は体調が悪くて、仕事を休みがちになっていた。

生活は破綻手前のところまでできているに、「ごめんなさい」を繰り返すだけで、生活保護を受けようとは絶対に言わない。

朝は新聞配達。

学校が終わればコンビニエンスストア。

こんなに仕事漬けの高校生なんて他にいないから、成績は落ちる所まで落ちてしまった。

正隆の上履きを踏んづけた時から、何一つ良いことがない。
まさしく最悪の高校生活だ。

第6話 避ける理由

「彼女になってくれたら、弁償代は帳消しにすると言ったことは謝る。でも、どうしてそんなに俺のことを避けるんだ」

生活費を引いた残りから、少しずつためたバイト代を封筒に入れて、朝刊と一緒に差し出すと、正隆は静かに問いかけてきた。

(どうしてこの人を避けるのか)

自分で自分に問いかけてみたけど、答えはなかなか見つからない。真剣な瞳を見つめているうちに、金縛りにあったように動けなくなつた。

雨が新聞をおおうビニールをパタパタと叩く音にはっとした。配らなければならない新聞は、まだたくさん残っている。

自転車の向きを変えようとした時、正隆がびしょ濡れだということに気が付いた。

手にした傘をモモに差しかけて、自分は雨の中に立っている。

十一月の雨は冷たい。

このままでは風邪をひかせてしまう。

いつものように急いで背を向けた時、重たい自転車がぐらりと揺れた。

「やまだ！ おい、やまだ！」

別人のように落ち着きを失った正隆の声がした。

どうしたんだらう？

自転車も身体もものすごく重い。
何が起こったのかわからぬまま、自転車に引きずられるようにして、
モモははずるとその場に倒れ込んだ。

目を覚ますと、端正な顔がすぐ目の前にあった。

「女子高生が過労だって!? 一体、どんな生活をしているんだ!」
?

思い切り怒りを爆発させておきながら、その手はモモの手を握っている。

「新聞……」

「販売店に地図をファックスしてもらって、配っておいた」
逃げる気力を失ったまま口を開くと、すぐに返事が返ってきた。

「学校……」

「お前は病欠。俺は自主休校」

「実力テスト……」

「そんなもの、いちいち気にすんな」

目の前の少年が実力テストの結果で一喜一憂するような人間ではないことは、モモだって知っている。

前回の統一テストで、正隆は日本中の高校生の頂点に上り詰めた。

一年生でありながら、東大合格は確実とされている。

世界を舞台に活躍する父親の後を継ぐために、海外の一流大学にでも入るつもりなのかも知れない。

住む世界の違う人。

「手を離して」

正隆は不満そうな顔をしたけど、それでもゆっくりと手を離した。

第7話 それでも距離は縮まらない

「家にも学校にも連絡済みだから、もう少し寝てる。腹が減ったら一階に下りて来い。それからこれ、書ける所だけでも書いとけ」
押し付けられた書類は、とある公的機関の奨学金申請書だった。

「でもこれ、人数制限もあるし、申し込み期間だって……」
「そんなものはどうにでもなる。その代わり、バイトを減らして、勉強しろ」

部屋を出て行く後姿をぼんやりと見つめながら、思い出したように、小さな声で礼を言うと、正隆は眼鏡のブリッジを持ち上げて微笑んだ。

「眼鏡代は受け取っておく、これから仕切りなおした」

こんなにたくさん言葉を交わしたのは初めてだ。

避ける理由も嫌う理由も本当は何一つないのだと、今頃になって気が付いた。

「……でも……」

唇から漏れた言葉は震えていた。

高い天井を見上げながら、モモはなぜか涙ぐんでいた。

二年になっても正隆はやっぱり一組だった。

モモは七組になったけど、教室は相変わらず別棟だったから、距離が縮まったわけじゃない。

昨年十一月の生徒会役員選挙で、正隆は副会長に選ばれた。

一年生で副会長というのは、生徒会始まって以来だというけど、二

年の先輩が会長に立候補していなければ、たぶん、正隆が会長になっていた。

「山田はいる？」

正隆の声を聞きながら、モモはこっそりと教室から逃げ出した。

まともに顔をあわせれば、挨拶ぐらいはするようになったけど、根本的には何も変わらない。

モモは相変わらず正隆から逃げ回っていた。

「ねえ、どうしてよ!？」

友人の顔を見つめたまま、モモは困ったように目を伏せた。

二年になってぐんと背が伸びた正隆は、日本海軍の士官服がモデルだという濃紺の制服が、怖いほどよく似合っている。

あの隣にいても良いのは、美しく聡明な名家の令嬢だけだ。

第8話 もてる？もてない？

「もつと自信を持ちなさいよ。モモはステキよ。ほっそりしていて色が白くて、真つ黒い髪も瞳も日本人形みたいだもん。そりゃあ、名前と外見が全然マッチしてないし、胸はぺったんこだし、頑固だし、逃げ足が速いし、思い込みが激しくて、おまけにおっちょこちよいだったりもするけど……」

「ねえ、全然、ほめてないんだけど」

思い切り唇をとがらせると、きれいにカールした髪を揺らした友は、つややかなピンク色の唇で微笑んだ。

「ふふっ、ちよつとしたやつかみよ。モモは自分がもてるんだってことも、全然知らないでしょう？」

「もてる？ 私が？」

ありえない言葉を耳にして、相手の顔を凝視した。

奨学金のおかげで生活は楽になったし、成績も少しは持ち直したけど、もてる要素なんてどこにもない。

その証拠に、高校二年にもなって、男の子に告白された経験は皆無だ。

「嘘だと思うのなら証明しようか？ モモと付き合いたって子と会ってみる？」

「と、とんでもない！」

携帯電話を出そうとする気配を察し、両手でバツテンを作って飛びすさったモモは、「ああ、また、逃げられた」という友の声を背中で聞きながら、急いで図書館に駆け込んだ。

落ち着ける席を確保しようと、奥の隅に向って歩いていくと、書棚に背を預けるようにして正隆が本を読んでいた。

「こ、こんにちは……」

回れ右するタイミングを失ったモモは、ぎこちない笑みを唇にのぼらせた。

英文の原書と思われる分厚い書籍から顔を上げた正隆は、無言のままどこか冷ややかな眼差しを向けてきた。

急に居心地が悪くなり、そのまま前を通り過ぎようとした時、すつと腕をつかまれた。

「あの、何か……」

「あるに決まってるだろう！」

腕にかけられた指にこもる力が強くなる。

思わずあげかけた悲鳴を飲み込んだ。

強引に連れて行かれた先は、かつてモモが正隆を連行した屋上だった。

昔、ここから一人の生徒が飛び降り自殺をしたとかで、ずっと立ち入り禁止になっている。

けれども鍵はかかっていないから、途中の階段で教師に見つかりさえしなければ、いつでも足を踏み入れることができるのだ。

第9話 本当の気持ち

「眼鏡の弁償代なんて、本当はどうでも良かったんだ」
良家の子息らしい言葉だが、声には苦悩がにじんでいた。

「俺は山田と対等になりたくて……」

「なれるわけないよ」

反射的に口をついて出た言葉に、正隆ははじかれたように顔を上げた。

責めるような、すぎるような眼差しに、モモは視線を泳がせた。

「い、伊集院君と私とじゃ、月とすっぽんだもん。あなたは大会社の社長の息子で、お金持ちで、学校一、ううん、日本一頭が良く、スポーツだってできるし、生徒会の副会長だし、背が高くて、足が長くて、顔も良くて、女の子は全員あなたのファンで……」

「全員じゃない」

「全員よ！」

「だったら、お前はどうなんだ!？」

「わ、私は……」

「誰に好かれたって、お前じゃなきゃ、意味ないんだよ!」

腕をつかむ手がふわりと離れた。

けれども解放されたと思ったのはほんの一瞬で、次の瞬間には息が止まるほど強く抱きしめられていた。

「きゃっ、な、何を!」

悲鳴まじりの声をあげると、黙れとでも言うように唇を塞がれた。

こじあげられた歯の隙間から、柔らかいものが入り込んでくる。

しびれた頭の片隅で、舌を入れられたのだと理解した。

息ができない。

酸素が足りない。

頭の中で何かがぐるぐる回っている。

それでも無意識に手を伸ばし、広い背中を抱きしめた。

（本当は好き。あなたが大好き）

ほらっ、心の中ではいくらでも言えるのに。

目尻から一筋の涙がこぼれ、モモの全身から力が抜け落ちた。

気を失った女生徒を抱きかかえた伊集院正隆が、真っ青になって保健室に駆け込んだというニュースは、放課後だったにも関わらず、瞬く間に校内を駆け抜けた。

貧乏を苦に自殺しようとしていた所を説得して思いとどまらせたとか、死者の霊に引きずられて屋上から落ちそうになった所を救助したとか、口から口へと尾ひれをつけながら伝わっていく話のほとんどは、事実無根のものばかりだ。

第10話 接点なんかなかった

「本当にかっこ良かったんだから！」

「私も見た、ドキドキしちゃった」

「いいなあ、私も伊集院様にあんな風にお姫様だっこされてみたーい！」

話題の王子様をひと目見ようと集まってきた少女たちは、保険医によって保健室から締め出され、それでも諦めずに扉の向こうにたむろしていたが、たまたま廊下を通りがかかった体育教師の一喝で、クモの子を散らすようになくなった。

ベッドのそばのパイプ椅子に腰掛けた正隆は、両手で顔を覆ったまま動かない。

「考える人」を何倍も深刻にしたようなその姿に、思わず手を差し伸べたくなる。

「あの……」

ためらいがちに声をかけると、機械仕掛けのようなきこちなさで上半身がゆっくりと持ち上がった。

眼鏡をかけていない顔は蒼白で、悲しいほどに無表情だ。

「俺は野蛮で、強引で、世界一の愚か者だ。お前には全くふさわしくない」

淡々と告げる声。

けれども膝の上で固く握り締められた手は、震えている。

「すまなかった」

何かを振り切るように立ち上がった正隆は、深く、深く頭を下げて、

静かに保健室から出て行った。

翌日から、正隆がモモの教室に姿を見せることはなくなった。新聞配達のアルバイトは、奨学金を受け取ると同時にやめてしまっていたから、正隆との接点は煙のように消えてしまった。

（うっん、違う、接点なんて初めからなかった）
生徒会長としての最後の演説をするために、よどみない足取りでステージに向う正隆を、まぶしい思いで仰ぎ見る。

噂では東大の経済学部を受験するらしい。
卒業後はハーバードのビジネス・スクールへ進むという。
凜とした瞳の先には果てしなく広がる輝かしい未来が待ち受けているのだろう。

モモの成績は二年生になってから持ち直し、地方の公立大学に辛うじて滑り込むことができた。

その頃には、失踪していた父が自殺していたことが判明し、生命保険が入ってきたことで、皮肉にも生活苦から解放されていた。

第11話 一目ぼれなんてばかげてる？

大学では、男の子から声をかけられたりもするけど、胸に焼き付けられた正隆の姿があまりに鮮烈で、誰かと付き合う気にはとてもなれない。

大学入学を契機に一人暮らしを始めたモモは、郵便受けに取り付けられた自分の名前を見て苦笑した。

「なんだか、昔のアイドルみたい」

母が再婚したために、モモの名前は山田モモから山口モモに変わっていた。

「山口さん、宅急便です」

モモはまたクスリと笑い、パソコンから顔をあげた。

モニターに表示されているのは、「Yahoo!ファイナンス」の株式チャート。

株に興味があるわけじゃないけど、正隆の父が経営する会社の株価をチェックすることが、何となく習慣になっていた。

受け取った荷物に貼られた送り状を見て、モモはハッと息を飲み、壁に背を預けたまま、ずるずるとその場へたり込んだ。

差出人の名前は伊集院正隆。

入っていたのは、三冊の手帳と一通の手紙。

時限爆弾を分解するような手つきで封筒を開くと、味も素っ気もない白い便箋が二枚入っていた。

一枚は全くの白紙。

そして残る一枚には、この国の未来を背負って立つスーパーエリートにふさわしい端正な文字が並んでいる。

「一目ぼれなんて、ばかげている」
冷やかな声が聞こえてきそうな、冒頭の一文にどきりとさせられた。

咄嗟に目を閉じたモモは、大きくひとつ深呼吸をして、再びこわくわと目を開けた。

一目ぼれなんて、ばかげている。

ずっと、そう思っていた。

でも、入学式の朝、桜の木の下に佇む姿に見とれていたことは、まぎれもない事実だ。

講堂に入ってから、僕はあなたを探していた。

だから大勢の目の前で失態を演じたことを恥じる気持ちより、あなたとの接点ができたことを喜ぶ気持ちの方が大きかった。

第12話 ただ、追いかけることしか

手紙の中では、一人称の「俺」が「僕」に、二人称の「お前」が「あなた」に変わっていた。

これを書いたのは、本当にあのオレ様王子なんだろうか？
僕って誰だろう？

あなたって誰だろう？

答えはわかりきっているのに、疑問を持たずにはいられない。
ときどきする胸をおさえながら、モモは続く文章に目を向けた。

あなたは僕から逃げ回っていたけど、

僕はかなり姑息な手段を使って、

あなたに近づこうとする男たちをブロックし続けた。

誰にも触れさせない。

あなたを守ることがするのは僕だけだ。

けれども僕の思いは空回りを続け、

守るところか、

傷つけることしかできなかった。

どんな逆境にもあなたは負けない。

あなたは僕を必要としない。

だから僕は諦めた。

少なくとも諦めたつもりだった。

大学に進学して、何人かと付き合って、

それでもあなたのことばかり考えている自分に、正直、嫌気がさしている。

高校生活を振り返った時、思い浮かぶのはあなたのことばかりだ。

同封したものは、ただ、追いかけることしかできなかった、みっともなくも懐かしい日々の軌跡。僕のことなど、さっさと忘れてしまいたければ、煮るなど、焼くなど、ご自由に。でも、もしも、そうでないのなら……。

文字がひどくかすんで見えるのは、視力の低下によるものではなく、涙があふれて止まらないからだ。たいして長くもない文章を何度も何度も読み返し、モモは手紙を抱きしめた。

三冊の手帳は、正隆が高校時代に使っていたと思われる、スケジュール帳だった。

制服の胸ポケットにちょうどおさまる大きさのそれを、モモはそっとな開いてみた。

最初のページに記された「一年一組 伊集院正隆」の文字に触れ、次のページを開いた所で、思わず顔を近づけた。

最終話 あふれる思い

「なにこれ!？」

カレンダー状のワクの中に、その日の予定を書き込んだのは普通だが、それと一緒に奇妙なマークが付されている。

相撲の星取表のようでもあるし、天気記号に似ていなくもない。一年と二年の途中までは多彩なマークがひしめいている。でも、三年にいたっては、とのオンパレードだ。

不可解な思いを抱きつつも、ゆっくりとページをめくっていく。体育祭、修学旅行、文化祭……一枚めくるごとに、こみあげる懐かしさで胸が一杯になり、気がつけば、時が経つのを忘れていた。

手帳の書き込みは卒業式の日で終わっていた。

この日、正孝は、少し離れた所から、「卒業おめでとう」と言うてくれた。

自分も同じ言葉を返したと思う。

「あっ!」

そこに付された を見た時、そのマークの持つ意味が、まるで天啓でも得たように理解できた。

会えなかった日は、目が合った日は、そして、言葉を交わした日は……。

時計の針は午後六時五十分を示していた。

携帯電話に伸ばしかけた手を引っ込めて、モモは、はじめたように立ち上がった。

(たぶん無理、ううん、今すぐタクシーで駅に向えば……)
答えを出す前に、夢中で表に走り出た。

耳元で風の音がする。

全力疾走なんて、高校の頃以来だ。

正隆の手紙の最後は、こう結ばれていた。

「もしも、そうでないのなら、今度はあなたが、僕に会いに来て欲しい」

新幹線に乗ってしまったら、今日中に帰ることは不可能だ。

そんな思いは、空車ランプを付けたタクシーを見つけた途端に、消し飛んだ。

(あなたに会いたい、あなたに会いたい、あなたが好き、あなたが……)

ずっと胸に秘めていた言葉が、今にもあふれだしそうだ。

宅急便の送り状を握り締めたまま、モモはちぎれるほど手を振った。

了

最終話 あふれる思い（後書き）

最後までお読み頂きありがとうございました！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7884c/>

ハイスクール・デイズ

2010年10月9日21時19分発行